

8

筑後久留米藩主有馬頼咸公の最後の病状

—平川良栄と高松凌雲と佐藤進が診療—

中山 茂春

福岡和白病院／久留米大学医学部 非常勤講師（医学史）

筑後久留米藩医平川良栄は同藩医中山元琳と共に明治3年10月から明治4年8月まで当時英医ウィリアム・ウィリスがいた鹿児島医学校でイギリス医学を学んでいる。平川良栄の子孫に伝わる歴史資料が福岡県久留米市役所文化財保護課に寄贈されています。その資料の中の「従三位有馬頼咸公病状並びに御容体書（高松凌雲謹識）」と「令扶への差出分 御容体書（平川良栄）」等について紹介いたします。有馬頼咸は筑後久留米藩の第11代（最後）の藩主。正室は將軍徳川家慶の養女精姫、実是有栖川宮韶仁親王の王女韶子。東京都中央区にある中央区有馬小学校は明治8年に有馬頼咸の寄付によって創立された為、その名がある。平川良栄は廃藩置県後の明治12年8月に東京都日本橋区蠣殻町3丁目4番地に医術開業している。資料によれば平川良栄は有馬頼咸公の最期の病状に関して主治医として治療に当たっている。平川良栄は治療の途中で高松凌雲の応援を乞うている。高松凌雲は筑後久留米藩出身であり平川良栄とは同郷である。高松凌雲は適塾で学び、將軍徳川慶喜の弟徳川昭武のお付きの医師としてパリ万博に随行してフランス医学を学び（慶応3年～慶応4年）、明治維新後は東京で開業している。高松凌雲謹識の『従三位有馬頼咸公病状並びに御容体書』の中には「老公年五十七平素強壯体格甚ダ堅実ナラズト雖ドモ未ダ曾テ大患ニ罹ラズ、只往歳腸カタルヲ患テ後下行結腸部ニ硬結ヲ残シ往々疝痛ヲ発スルノミ、常ニ飲酒ヲ好マズ摂生ヲ慎ムト雖ドモ食量多キニ過グ、本月六日嗜ム所ノ鰻鱈ヲ喫ス、其飯常ノ如ク軟ナラズ為ニ稍々其量ヲ減ズ、然レドモ平食ニ比スレバ較々多シ、翌七日腹滿ヲ覚フ、平川良栄氏健胃驅風ノ薬剤ヲ進ム、諸症緩解スルヲ以テ後服ヲ止ム…（中略）…十六日平川氏ノ急報アリ、午后三時始メテ往診ス、病来ノ日数ニ比スレバ衰弱甚ダシ、脈一百搏微ニシテ痙攣性ヲ帯ブ、体温三十九度舌上乾燥シテ黒苔ヲ帯ブ、大渴引飲腹部膨脹ス、之レヲ按ズルニ左ノ下腹部ニ一小塊ヲ觸ル、強壓スレバ重痛、輕按スレバ輕快ヲ覚フ、盲腸部モ亦微痛ノ感ヲ覚フ、而シテ体温ニ昇降アリト雖ドモ熱候已ニ六日ヲ経過セリ、因テ截熱ノ方法ヲ平川氏ト議シ、キニーネ九グレーンヲ取テ稀硫酸三滴水ニ瀉ニ溶解シ頓服セシメ、塩酸リモナーデヲ用服剤トナス、腹部ニハ莢若水銀軟膏ヲ塗擦シ緩和琶布ヲ貼ズ、固形ノ食料ヲ禁ジテ只飲料ノミヲ命ズ、此夜始テ安眠ス…（中略）…本日午後三時陸軍々医監佐藤進氏来診シテ曰ク、此症腸焮衝ヨリ腹膜ニ波及セシ者ナリ、然レドモ衰弱已ニ甚ダシキガ故ニ身体維持法ヲ急務トス可シ、則チ麝香龍腦ハ持続シ其他亦葡萄酒ヲ用ヒ局所療法ハ水銀軟膏塗擦及ビ冷電法ヲ施ス可シ、豫后ハ不良ナリ最トモ注意ス可シト、右ノ処方ニ由リテボルトワキンヲ稀薄トナシ試用ス、冷電法ハ諸症已ニ危険ナルヲ以テ施スヲ果サズ、而シテ漸々衰弱ニ陥リ廿一日午前第二時卒然痙攣ヲ発シ窒息ヲ以テ死ス」とあります。資料の中には、明治14年5月20日午後3時陸軍軍医監佐藤進氏来診とあります。佐藤進氏は第三代順天堂堂主であり陸軍軍医監（後の陸軍軍医総監）であります。ここに英医ウィリスにイギリス医学を学んだ平川良栄とフランス医学を学んだ高松凌雲とドイツ医学を学んだ佐藤進が集結して有馬頼咸公を治療した記録がある資料は大変興味ある貴重なものと思われるので紹介したいと思います。